

▶ AIによる捕獲技術(かぞえもん)

わなの種類	捕獲実績	捕獲個体の構成
囲いわな + かぞえもん	捕獲 1	5 頭: ♀ 1 成獣、♂ 2 幼獣、♀ 2 幼獣 CPUE(0.042)
囲いわな	捕獲 1 捕獲 2	1 頭: ♂ 亜成獣 (0.062) 1 頭: ♂ 亜成獣 (0.007) CPUE 平均 (0.013)
箱わな	捕獲 1 捕獲 2 捕獲 3 捕獲 4 捕獲 5 捕獲 6	1 頭: ♂ 亜成獣 (0.04) 1 頭: ♀ 亜成獣 (0.023) 1 頭: ♂ 成獣 (0.036) 1 頭: ♂ 亜成獣 (0.04) 3 頭: ♂ 1 幼獣、♀ 2 幼獣 (0.027) 3 頭: ♂ 2 幼獣、♀ 1 幼獣 (0.067) CPUE 平均 (0.039)

- AIゲートの捕獲効率は若干高い
- AIゲートは成獣を含む複数頭捕獲に有効

▶ ICTによる捕獲技術(まるみえホカクン)

- 赤外線または温度センサーにより動物の接近を感知
- 動物接近を登録者にメール通知
- リアルタイム映像を見ながら遠隔操作で捕獲



▶ ICTによる捕獲技術(まるみえホカクン)

わな導入場所	ニホンジカ個体群 密度推定値	年間捕獲実績
五島市島山島地区	47.3頭／km ²	51頭
対馬市佐賀地区	68.0頭／km ²	2頭
対馬市志多留地区	67.8頭／km ²	1頭

五島市島山島における捕獲に関わる経営評価の一例

	捕獲日数	捕獲実績	巡回数	巡回及び 処分経費	1頭当たりの 捕獲経費
ICT導入前	228日	25頭	65回	115,950円	4,638円
ICT導入後	152日	21頭	43回	76,713円	3,653円



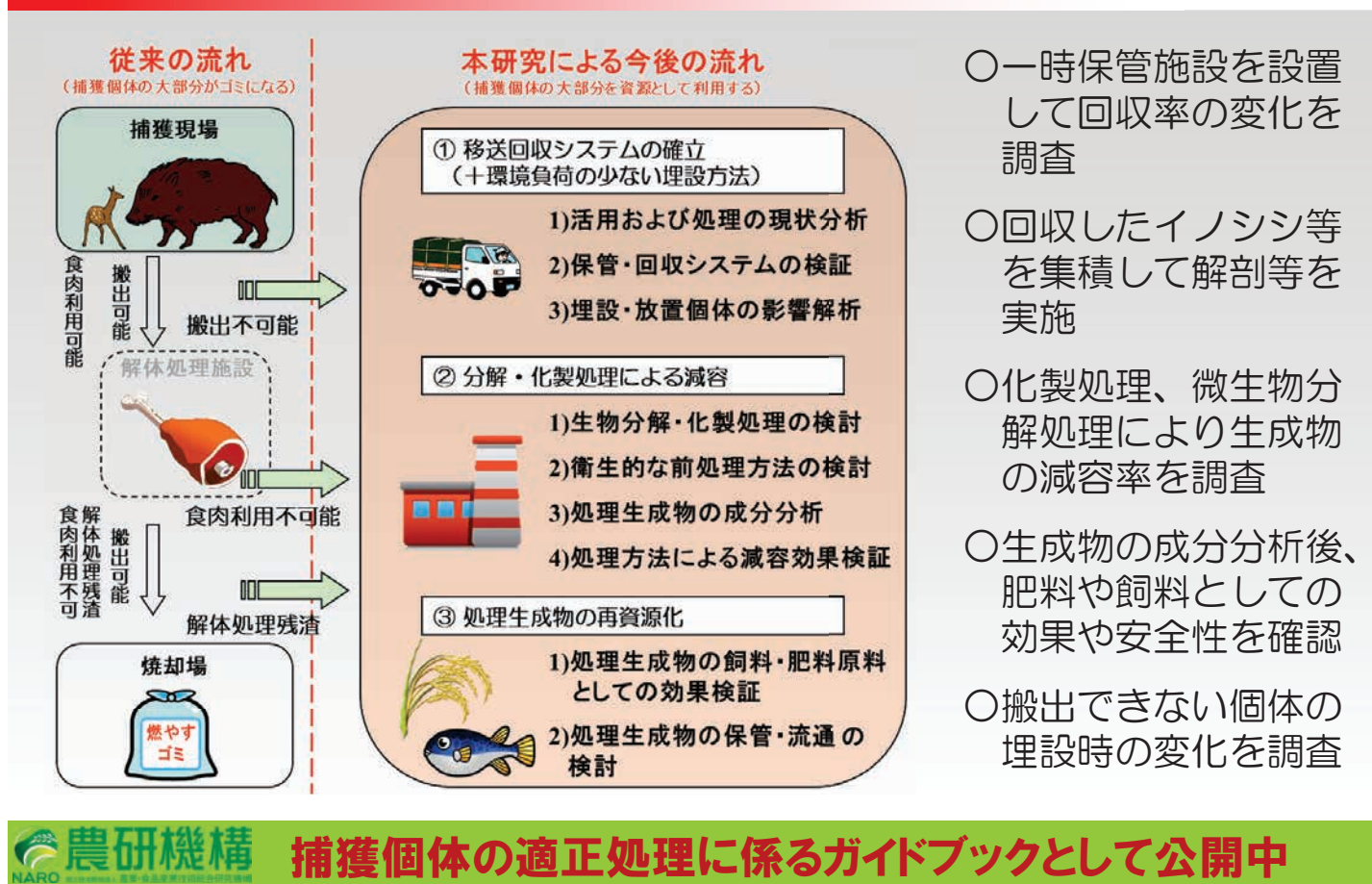
優れた技術でも地域へのアレンジと人材育成が必要

▶ 電気ショックによる止め刺し

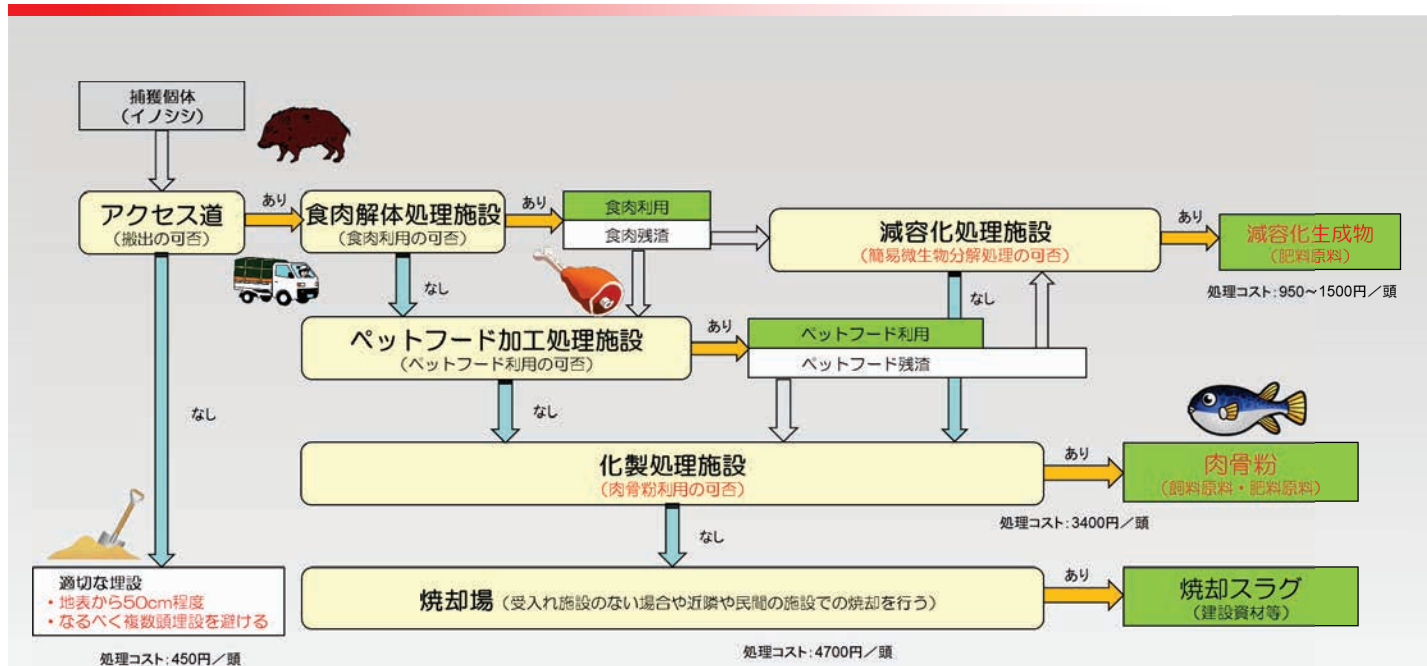


出血を伴わない⇒感染症対策や精神的負担の軽減

▶ 飼料・肥料の原料等としての再資源化



▶ イノシシ捕獲個体の利用モデル



イノシシ捕獲個体の集積→回収→資源利用と再資源利用がポイント

▶ スマート捕獲・スマートジビエ技術の確立



▶ ジビエアプリツールの研究開発



スマートフィンで写真撮影

(自動取得データ)

- ・捕獲者
- ・捕獲日時
- ・捕獲場所
- ・捕獲個体の体長と体重

(選択データ)

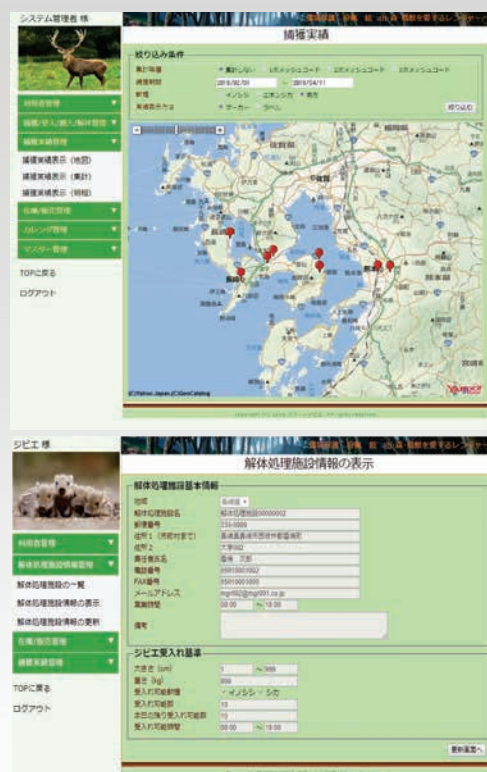
- ・捕獲手法
- ・止め刺し手法
- ・性
- ・搬入施設

⇒クラウド上に記録
(リアルタイムで共有)

＋
メールで施設等に通知

(アウトプットデータ)

- ・表およびグラフで上記項目を表示



捕獲個体に係るデータを自動集積し共有できるシステム

▶ 誘引|エサの選定：誘引|効果の結果

	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
出沒頭数	1	1	2	2	3	6	3	—	1	—	1	—	—	—	1	1	2	1	1	1	3	1	2	2	6	2	2	1
採食頭数	1	1	2	2	3	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	1	2	1	2	2	2	2	1	1
コメヌカ																												
圧ベン																												
配合飼料																												
ハイキューブ																												
ミニキューブ																												

- 28日中、23日間でイノシシが出沒、うち17日間で採食を確認
- 最終的にはすべてのエサで採食行動を確認
- 穀物ベースのエサの採食終了後に、牧草ベースのエサを採食する傾向がみられた
(誘引ムラが存在するがエサのベースにより嗜好が存在)



誘引の順位付け(採食期間や優先度など)は難しい

▶ ドローンによるエサの散布方法の検討

		1m	2m	3m	4m	5m	50%以上	80%以上
コメヌカ	10m	1%	11%	31%	36%	42%		
	20m	0%	0%	0%	0%	0%		
	30m	0%	0%	0%	0%	0%		
	40m	0%	0%	0%	0%	0%		
圧ベン トウモロコシ	10m	18%	71%	83%	85%	86%		
	20m	6%	25%	46%	67%	81%		
	30m	2%	8%	17%	28%	37%		
	40m	0%	0%	0%	0%	0%		
配合飼料	10m	12%	60%	84%	91%	94%		
	20m	13%	38%	53%	62%	77%		
	30m	4%	15%	34%	47%	58%		
	40m	7%	25%	42%	52%	59%		
ハイキューブ	10m	9%	31%	50%	67%	79%		
	20m	6%	21%	44%	65%	81%		
	30m	4%	12%	24%	39%	53%		
	40m	2%	5%	8%	20%	31%		
ミニキューブ	10m	9%	33%	63%	87%	99%		
	20m	1%	2%	6%	15%	32%		
	30m	1%	11%	23%	41%	55%		
	40m	1%	11%	19%	31%	44%		

散布困難

低空飛行時

低空飛行時

低空飛行時
(わなの外側)

低空飛行時



ドローンに積んで撒くだけではわな内部への誘引は困難

▶ ドローンによるイノシシ等の誘引：散布の検討



山林（上空が閉塞）

3m以内：6/12
（30m上空）

圃場（上空が開放）

3m以内：12/12
（30m上空）



▶ ドローンによるイノシシ等の誘引：散布の検討



▶ 本日のまとめ

- 鳥獣被害対策の基本技術はほぼ確立されており、それを支援する制度や体制も存在している
- 過疎化・高齢化が進む中での対策の推進は更なる効率化、省力化が求められる（地域も担当者も）
- 従来の技術や制度をフル活用しながら新技術の導入も検討する必要がある
- 技術だけではなくそれを使う人材育成が必要